『雲玉和歌抄』の謡曲受容
ー「雪鬼」「杜若」「芭蕉」を通してー

二階　健次

Acceptance from Noh song to *the Ungyoku-Waka-Sho;* Through the consideration of *Yukioni, Kakitsubata* and *basho.*

NIKAI Kenji

Abstract

The Ungyoku-Waka-Sho is a collection of waka poems compiled in 1514 by a poet of unknown origin called *Noso-Junso* in Motosakura, Shimousa Province.

Of the approximately 580 waka poems in theare included, but approximately 200 are privately selected waka poems. This anthology has a strong connection with Noh song. Therefore, this paper take up *Yukioni*, *Kakitsubata*, and *Basho*, and considers their acceptance of *the Ungyoku-Waka-Sho*.

Yukioni is an abandoned Noh song that seems to be made by *Konparu-Zenchiku*, but its outline can be seen in *the Ungyoku-Waka-Sho*. This is a good example of how *the Ungyoku-Waka-Sho* shows the influence of waka poems. The theme is the legend of *Ariwara-no-Narihira*, which is related to Yukionna in *Katano*. Both *Kakitsubata* and *Basho* are made by *Konparu-Zenchiku*. *Kakitsubata* is based on the *Ise-Monogatari* and is strongly influenced by the old notes of it.

In other words, *the Ungyoku-Waka-Sho* is also an attempt at a new creativity based on a different the old note. The main theme of *Basho* is Basho-no-yabure, and the historical fact that *Ota-Dokan* died sideways can be seen from the friendship of *Noso-Junso* in *the Ungyoku-Waka-Sho*.

From these cases of three Noh-songs have a common theme of "all things have the Buddha nature" which is the teaching of the Lotus Sutra.

The source is the phenomenon caused by water.

Key Words

all things have the Buddha nature, Ungyoku-Waka-Sho, Yukioni, Kakitsubata, Basho

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

目次

一　はじめに
二　謡曲「雪鬼」の受容
三　謡曲「杜若」の受容
四　謡曲「芭蕉」の受容
五　おわりに

一　はじめに

納叟馴窓が、下総国の本佐倉城主・千葉勝胤の下命を受け、歌集『雲玉和歌抄』（以下、『雲玉抄』という。）を編纂したのは、京都大学本の奥書によれば、永正十一年（一五一四）四月六日のことである。伝本はほぼ一系統なので、本稿は『新編国歌大観第八巻私家集編Ⅳ』所収の神宮文庫蔵本を利用する（注1）。『雲玉抄』は、約五八〇首の歌が所収されているが、約二〇〇首が自詠歌という私撰集である。しかし、その内容は、万葉歌人から同時代の武家歌人の詠歌を含み、物語、軍記物、説話、伝承など多様なジャンルからの言説を取り込み、自歌創作のために利用するという中世和歌の特質が注目されている。

「謡曲」もそのようなジャンルの一つと考えられる。『雲玉抄』の歌語と詞章が共通する謡曲は「阿漕、安達ケ原、海士、井筒、善知鳥、杜若、葛城、加茂、昭君、西行桜、桜川、志賀、当麻、龍田、軒端梅、芭蕉、松風、三井寺、山姥、雪鬼」の二十曲に及ぶ。このうち、『雲玉抄』研究で注目されるツールの一つである『謡曲拾葉抄』（注2）が『雲玉抄』を謡曲詞章の解説に引用しているものは「阿漕、善知鳥、杜若、葛城、西行桜、桜川、志賀、当麻、龍田、軒端梅、松風、三井寺、山姥」の十三曲である。この数は『雲玉抄』という中世歌集の成立要件に謡曲との深い関わりがあることを表している。

先行研究で「雲玉抄と謡曲」を論じたものは、佐々木雷太氏に二本（注3）みられるが、「西行桜」「当麻」「井筒」「昭君」を取り上げ、『雲玉抄』の七六番歌が「西行桜」を、同三三一・三三二番歌とその詞書が「当麻」を本歌としていると論じ、謡曲を和歌の本歌に位置付ける可能性について論じている。室町中・後期において謡曲を本歌として創作することは、決して特殊な行為ではなく、あり得べき選択肢の一つなのである。『雲玉抄』の「序」に

近曾万葉由阿みとて詞林最要をかき六花をあつめて定家為家のあとをけがせしかども、その詠歌とて一首も見えず、…多才と見えてわがものなし

とある。由阿弥は立派な万葉研究を残したが、自詠歌は一首もないと批判している。納叟にとって、謡曲から歌を解釈することはすべて新たな自作のために行うものと考えている。そこで、『雲玉抄』に関わる謡曲のうち、まだ先行研究が未着手となっている「雪鬼」「杜若」「芭蕉」を取り上げ、納叟はこれらの謡曲をどのように『雲玉抄』に採り込み、自己創作に結びつけたかについて、さらにこれら三曲に共通する主題について考察する。

二　謡曲「雪鬼」（注4）の受容

「雪女」に纏わる伝説は、ラフカディオ・ハーンの『怪談』がよく知られている。雪の降る夜、白い衣を着た女の姿で現れる雪の精のことである。この精霊の登場する謡曲が「雪鬼」である。謡曲が扱う季節は春秋の場合が多く、本曲のように冬であるのは珍しいが（注5）、冬といっても厳冬期ではなく春はすぐそこまで来ている頃になっている。この曲はすでに廃絶曲となったものだが、『雲玉抄』に本曲に関わる説話が掲載されて注目される。

業平朝臣の歌に

わけつつや雪のかたのの夕暮にぬれぬ宿かす人しなきかな（313）

かくよみ給ひしに、ひとりの女きたりて

春までのちぎりは露もしら雪のぬれぬやどりをかりの身にして（314）

一夜ちぎりてともなひかへりしに、程なく消失せぬ、雪のせいとかや

この三一一三番歌は『詞花集』「冬部」一五二番歌（注6）藤原長能の和歌を引用している。

鷹狩をよめる

あられふるかたののみのかりごろもぬれぬやどかす人しなければ（長能歌）

この歌を受けて衲叟の自詠歌三一四番は創作され、全体を「雪女」の説話に創作したのではないか。しかし、長能歌の初句は「あられふる」で、降っているのは霰だが、衲叟の引歌では「雪のかたの」と雪になっているという違いもある。この長能歌は『俊頼髄脳』（注7）に引用がある。そこにはこの天候について言及がある。概説すると、「鷹狩」を題に、藤原長能と源道済の二人の詠んだ歌が共に上手だったので評判になった。長能歌に対し、道済歌は

ぬれぬれもなほかりゆかむはし鷹のうはげの雪をうちはらひつつ（道済歌）

というものであった。互いに勝を譲らないので、四条大納言の藤原公任に判を求めたところ公任は次のように判じた。長能歌は

もろもろのひが事のあるなり。鷹狩は雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰の降らむによりて、宿かりてとまらむは、あやしき事なり。霰などは、さまでかりごろもなどの、ぬれ通りて惜しき程にはあらじ

即ち、鷹狩というものは、来雨だからといって止めるものではない。まして霰で宿を借りるほど濡れそぼつことはないはずだ、理屈があわないとしている。一方、道済歌は、濡れながらも一層、狩りをしようという鷹狩り本来の姿が詠まれている。よって、道済歌を勝とした、と云っている。つまり、霰と雪という景物の捉え方が勝敗を分けたのである。

この言説を踏まえたのであろうか、衲叟は「あられふる」をやめて、「雪のかたの」に変えて、『雲玉抄』に収録したと思われる。霰より雪の方が想像を掻き立てやすいと考えたのかもしれない。つまり、古歌を無条件に引き入れるのではなく、衲叟が読んだであろう歌論書を踏まえて、自己のイメージに沿って歌を変換して引用する技量をみせているのは注目される。三一三番歌における衲叟の創意は長能歌を本歌に「業平朝臣の歌」としたことにある。これを業平歌とすること自体が、衲叟の自詠歌的な行為なのである。衲叟が捉えたイメージ、創意とは一体何か、を次に考えたい。

交野は、桓武帝が、広く山野を駆けて鳥獣を楽しんだ狩場とされ、行幸は十数回に及んだ。帝の遊猟がある度に、その下の皇族や宮廷人達も続々と交野が原に来ることになって、交野を歌に詠み合い、「河内国」の歌枕の地となった。なかでも『伊勢物語』「八二」は業平と惟喬親王の交友の地であることも踏まえている。

むかし、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時右の馬頭なりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで酒をのみ飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜いとおもしろし。

その木の下におり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人のよめる。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたる。また人の歌、

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちてかへるに、日暮になりぬ。御供なる人、酒をもたせて野より出できたり。この酒を飲みてむとて、よき所をもとめゆくに、天の河といふところに至りぬ。親王に馬頭大御酒まゐる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる題にて、歌よみて杯はさせ」とのたまうければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らし棚機津女に宿からむ天の河原に我は来にけり

親王、歌をかへすがへす誦じ給うて、返しえし給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それが返し、

一とせにひとたび来ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ（『伊勢物語』「八十二」）（注8）

『伊勢物語』は「狩場の交野」「桜の趣」「天の川」を歌い上げた歌物語となっているが、衲叟歌が取り込んでいるのは「かたの」「夕暮」「宿かす人のなさ」を場面とするが、「雪」や「女」は『伊勢物語』からは出てこない。つまり、衲叟歌は別の説話が下敷きされているようにみえる。

「交野」は次のような文学層を持っている。交野を多くの歌人が歌にしたが、中でも『新古今集』春歌下一一四番に収録された藤原俊成歌が最も知られたものである。

摂政太政大臣家に五首歌よみ侍けるに　皇太后宮大夫俊成

またやみむかたののみのの桜がり花の雪ちる春のあけぼの（注9）

再び見ることができるだろうか、こんな光景を。「かたの（交野）」の桜を求めて逍遥していたところ、雪さながら花の散る春の曙に出遭った。先の『伊勢物語』を踏まえながら、禁野である「かたの」の「カタ」に「難い」の意を掛けている。建久六年（一一九五）二月、九条良経邸歌会での作で俊成は八十二歳の最晩年のものである。

俊成歌を踏まえたものとして、『太平記』巻第二「俊基朝臣再関東下向事」がある。

落下の雪に踏み迷ふ　片野の春の桜がり　紅葉の錦をきて帰る、嵐の山の秋の暮　一夜を明かす程だにも　旅宿となればものうきに　恩愛の契り浅からぬ、わが故郷の妻子をば、ゆくへも知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思わぬ旅に出でたまふ、心の中ぞ哀れなる（注10）

この章段は日野俊基が後醍醐帝の命を承り鎌倉幕府倒幕に奔走したが、捕えられ一度は釈放されるも、再度謀り事を行ったとして、ついに鎌倉に送られ斬首される「東下り」である。「落下の雪に踏み迷ふ　片野の春の桜狩」は俊成歌から「かたののみのの桜がり花の雪ちる」の句をとり、謀反の夢の破れを落花の感覚に擬えている。そして、「紅葉の錦をきて帰る　嵐の山の秋の暮」は『拾遺集』秋二一〇番の藤原公任歌「朝まだき嵐の山の寒むければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」から歌語の「紅葉の錦」「きる（着）」「嵐の山」をとり、春と秋の対比表現の技法を際立たせて、「交野」は「難し（がたし）」の掛詞に掛ける。「秋の紅葉」は「血潮の紅」を「きる（着）」は「切る」の掛詞に掛け、処刑を暗示する。俊成歌の情景をうまく取り込み、公任歌の歌語を対比させて、二つの和歌をペアリングし、謡のように滑らかな語り出しで調子を上げ、能楽を見るような躍動感を際立たせている。そして、「東下り」という『伊勢物語』の文学風土を継承していることも見逃せない。このように交野は文学的には歌枕、そして東国へと導く起点となっていることが、特に東国歌人の衲叟の意趣に適っていた。しかし、ここに、もう一枚加わるのが、「落下の雪」に込められた「桜」

の散り方である。桜から雪へ、という連想が一人の「女」を登場させるからである。それが三一四歌に現れた雪女である。先行研究に、寛正五年（一四六四）以後、文明十四年（一四八二）以前に成立したとみられる『長禄記』「交野業平事」（肥前島原松平文庫本）に次のような業平の逸話が採録されていることを指摘している（注11）。

此交野ニテ一年セ。業平連日ノ御狩在リ。比ハ三冬ノ末。雪万天ニ満。其時業平何トナク湿ス。宿借ス人シ無レハト御口號在シニ。何共無ク女来テ。御宿ヲ参ラセント云フ。応テイザナイテ。一夜契給シニ。情ノ深カリケレハ。都ニ列テ帰リ。無程明ル春ノ長閑気。顔ハセ白白ト成ツツ。姿モ消テ失ニケリ。雪ノ精トハ其時コソ被思知ケレ。（『長禄記』）（注12）

『長禄記』は応仁の乱の元凶といわれる畠山義就（よしなり）の軍記である。畠山氏の家督継承問題で畠山持国の養子政長と実子義就の争いが描かれる。巻末に「文明十四年仲春下旬之比如本写之畢」とあり、衲叟と同時代のものである。この中で、義就が河内国に転戦した折り交野に纏わる業平の説話を記した箇所が当該のものである。「河内国の交野はその昔、業平が鷹狩に来ていて、大雪の日に見舞われ、濡れて行き暮れ、濡れぬ宿かす人しなければ、と口ずさんでいると、どこからともなく女が現れ、宿を貸すと導いた。業平は契りをこめ、情を深くしたので都へ連れ帰った。春になると女は日に日に衰えをみせ、遂に姿を消してしまった。そして、女が雪の精であることを知った」、という粗筋が記されている。

また、次の記録も注目される。『雲玉抄』にもその名を留め、衲叟や東常縁（とうのつねより）とも繋がりの深い連歌師・宗祇による『宗祇諸国物語』に宗祇が越後国に滞在していたときに雪女を見たとの記述がある。概要は次のようなものである。

ある大雪の日、未明に宗祇が厠へ行こうとして、枕元の戸を開け東を見ると、竹藪の端に、女が立っていた。背丈は一丈（三メートル）ほどもあり、肌は白く透きとおって、白いひとへの袖を着ていた。二十歳に満たないようだが、真っ白な髪を長く垂らしていた。何者か見届けようとするとすぐに、姿は消えてしまった。夜が明けてこのことを人に尋ねると「それは雪の精、俗にいう雪女で、こんな大雪の年には、稀に現れる」という。私（宗祇）は不審になって「誠に雪の精ならば深雪の時にこそ出るべきで、雪の消え失せた春先に及んで出るのは雪女というべきか」と云へば、人は「花は散ろうとして美しく咲き、落ちんとして紅葉する。灯は消えんとする時に光がいや増す如く」という。道理だ。（『宗祇諸国物語』巻五「化女苦朧夜雪」の概要）（注13）

これは江戸期に書かれた仮名草子なので、宗祇に仮託された作話の可能性があるが、雪の精、化身として姿を現わすという話型があり、雪女が登場する初期のもので、内容も「雪女の姿を見た」というだけの素朴な記録である（注14）。『伊勢物語』と融合して、最後は雪女が融けてなくなるという話型を持つ『長禄記』よりは古いと思われる。「雪女」の祖型の伝承が東国にすでにあって、宗祇周辺で話題になっていたのかもしれない。この二つの言説の畠山義就、宗祇の二人とも衲叟と時代が被る点が重要である。『長禄記』や『宗祇諸国物語』に記される伝承を衲叟が宗祇から見聞して、謡曲「雪鬼」に触れたとすれば、その概要を素材にして三一四番歌を記す動機となったことが考えられるからである。それは、応仁の乱下の旅の連歌士宗祇が齎す説話が東国の土俗的素地として敷かれ、「雪鬼」が齎す王朝文学と融合し、在原業平の和歌世界に新たな膨らみを持った中世世界が成立するからである。

衲叟が見たと思われる謡曲「雪鬼」とはどのようなものであったか。廃絶曲なので原曲は解らないが、『長禄記』や『雲玉抄』をフィードバックさせる形で、近年、西野春雄氏が研究し、『未刊謡曲集　続十六』に復元曲「雪鬼」を掲載した。氏によれば、この「雪鬼」は伝本が三

系統（元禄二年版本系、新謡曲百番系、福王流系）あるが諸本間に大きな差異はなく、復元は、福王流系本に基づいてなされているとしている。

これは一所不住の僧にて候。われいまだ河内の国を見ず候ふほどに、このたび思ひ立ち河内の国一見と志し候、……不思議やな降りまさる雪嵐のうちに、女性一人来り給ひ、われに言葉をかけ給ふ。……これは交野の禁野とてゆえある所なり。さても在原の業平この野にての御狩の時、にはかに雪降り日も暮れしかば、立ち寄り給ふべき便りもなかりしに、業平一首の歌に、「いかにせん交野の御野の狩衣」「濡れぬ宿貸す人しなければと、かやうに詠じ給ひしに、ひとりの女出であひて、おん宿を貸し申せしなり、…分けつつも、行くや交野の夕暮に、行くや交野の夕暮に、濡れて宿貸す、人もありけり、……在原の業平は、君の仰せに従ひこの原に下り終日に、御狩のありしに、三冬の末つかた、やや降りまさる雪嵐の、冷ややかに吹き落ちて、手馴れの駒も立てかぬるや、…その時業平は、濡れぬ宿貸す人しなきと口ずさみたりしに、ひとりの女来りつつ、一夜仮寝の草枕、契りをこめし心ゆえ、やがて、伴ひ都路に、帰るや年も立つ春の、女は心悩ましく、しぼめる花の色なうて、匂ひも絶ゆる顔ばせの、しほしほとなり果てて、日影に消えし女こそ、交野の雪の鬼なれ……春までの契りは露も白雪の、ぬれぬやどりを、かりの身にして、あら有難のおん弔ひやな、われ雪鬼の女なるが、御僧の今のみ法に引かれ、これまで顕はれ参りたり、よく弔ひてたび給へ……（謡曲「雪鬼」復曲本）（注15）

ここでは、『伊勢物語』の鷹狩の主人公である惟喬親王は在原業平に代わり、藤原長能歌の霰に難渋するのではなく大雪に宿を求める形に、変容されている。さらに、現れた里の女と契りを交わし、都へ連れ帰るが、春の長閑さとは裏腹に、女はどんどん弱り、衰弱を深めて、ついに消える。その正体は雪の精であった。つまり『長禄記』や『雲玉抄』の話型と同じである。そして、ヒロインの雪女は『宗祇諸国物語』が説くように「春の雪に」表れている。つまり、「交野→春の雪→落下（桜）→雪女→消失」の構図が話型の基礎となる。そして、この雪女は「俊頼髄脳→伊勢物語→俊成歌」という文学世界から説話の世界への切り替えの転換点的存在となる。『伊勢物語』は業平の「色好み」の物語であるから、業平の説話に「雪女」という女性性が加われば、『伊勢物語』が踏まえられやすい。雪の精の雪女が一人の女性となって、雪の中に姿だけを見せて消えるという伝承の位置から、登場する人たちと関わりながら自己存在をアピールしてから消えるというドラマチックな謡曲へ大きく飛躍していっている。中世和歌がこのように在地伝承（土俗）と既存の物語（王朝文学）の融合を出発点とし、和歌を「背伸び」させ、中世和歌を形成していることは和歌の一つの在り方でもある。

「物語（伊勢物語）から和歌（長能歌）へ、和歌（長能歌）から次の和歌（俊成歌）へ、次の和歌（俊成歌）から別な物語（太平記）へ、物語（太平記）から説話（長禄記）へ、説話（長禄記）から謡曲（雪鬼）へ、謡曲（雪鬼）から第三次の和歌（雲玉抄）へ」と「典拠→取り込み→再構成」という受容、影響の構図を描くことができる。

以上、『雲玉抄』の自詠歌に辿り着くまでに伊勢物語、俊頼髄脳、交野の和歌、太平記、長禄記、雪鬼、宗祇の説話が深く関わっていることをみてきた。『雲玉抄』は自詠歌に辿り着くまでにはこのような「取り込み→再構成」の重層構造に目を向けるべきである。

三　謡曲「杜若」（注16）の受容

日野俊基の「東下り」よりは古く文学に結晶したものに業平関連の『伊勢物語』九がある。

むかし、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京

にはあらじ。あづまのかたに住むべき国求めに、とてゆきけり。……三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。……その沢に、かきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句のかみにすえて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣きつゝなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひの上に涙落してほとびにけり。

（『伊勢物語』「九」）（注17）

この『伊勢物語』「九」の「東下り」を典拠にした「杜若」とは次のような説話である。「三河国八橋の沢辺の杜若を眺めていた諸国一見の僧の前に一人の女が現れる。この地で折句を詠んだ業平の故事を語り、僧を庵に招く。女は業平、高子の形見を付けて、自分は杜若の精だと名乗る。

「色もひとしほ濃紫の、なべての花のゆかりとも、思ひなぞらへ給はずして、とりわき眺め給へかし」

「まことはわれは杜若の精なり。植え置きし昔の宿の杜若と、詠みしも女の杜若に、なりし謂はれの言葉なり。」

「植え置きし、昔の宿の杜若」

「色ばかりこそ、昔成けれ」

「昔男の名を留めて」（以上、謡曲「杜若」）（注18）

杜若の精は舞を舞い夜の白む頃、消え失せる。」この謡曲の章段に対応して衲叟は『雲玉抄』で次のように記す。

杜若は、堀川以来は春に用ひたれど、後撰には夏に入りたれば、女によせて申すほど夏部にいれぬ、その故は、とし方といふ人、藤原のかつみにうとくなりたる人のよみて杜若につけてつかはしし

いひそめし昔のやどの杜若色ばかりこそかたみなりけれ（119）

女の夢に返しける歌

紫の色にいでずはそれと見じいとどへだつる宿のむかしを（120）

杜若のせいの歌なり、これより女を杜若といふ事あり（『雲玉抄』）

『雲玉抄』は「杜若」について『堀河百首』では「春部」となっているが、『後選集』は「夏部」であることを指摘する。これは『後撰集』巻四　良岑義方（よしみねのよしかた）が藤原かつみの命婦に杜若につけて贈った歌「いひそめし昔の宿のかきつばた色ばかりこそかたみなりけれ」（『後撰集』160）（注19）が「夏部」に配置されているからである。『雲玉抄』はこの『後撰集』を引用した一一九番歌に一二〇番歌の返歌を付けたもので、返歌は衲叟の自詠歌と思われる。『謡曲拾葉抄』はこの「杜若」の「誠はわれは杜若の精なり。植えおきし昔の宿の杜若とよみし」という詞章の解釈に『雲玉抄』を引用して次のように記す。（注：『雲玉抄』を「雲玉集」と表現している。）

今案雲玉集に昔の宿の杜若とよみてつかはしけるを夢に杜若の精、女に成て紫の色に出すはと返歌しける也。然るを此謡には昔の宿の杜若と云歌を杜若の精のよめるやうに作るはあやまり也。又、後撰集及雲玉集に上五文字「いひそめし」とあるを「植置し」とうたふは相違也。又、此謡の奥に此歌の下句「色計こそ昔成けれ」とあるも相違せり。又、後撰に義方と有、雲玉にはとしかたと有。但し、後撰の説を是とすべし。（『謡曲拾葉抄』）（注20）

つまり、『謡曲拾葉抄』は「謡曲が「植え置きし昔の宿の杜若」の歌を杜若の精が詠んだように作るのは誤り。初句の「植え置きし」は誤り。謡曲の後半にある「色ばかりこそ昔なりけれ」という謡の文言

も誤り。『雲玉抄』の「としかた」は『後撰集』に「義方」とあるので誤り。」との主張である。つまり、「『雲玉抄』の「いひそめし」は正しいが、「とし方」は誤り、謡曲「杜若」の「植え置きし」「昔成けれ」は誤り」となる。謡曲で『後撰集』歌の初句の「いひそめし」、第五句の「かたみなりけれ」が各々、「植え置きし」「昔成けれ」に変えられて使われている、としているのである。これは、『伊勢物語』古注（注21）である『十巻本伊勢物語注　冷泉家流』九に

杜若トハ、人ノ形見ニ云物也。サレハ、二条后ノ御事ヲ、御方ミトイハン為ニ、カキツハタヲ云也。『後撰集』ニ、
イヒソメシ昔ノ宿ノカキツハタ色ハカハコソ形見也ケレ
此歌ノ心、『日本紀』云、民部少将橘先人ト云人、……人ノ形見ニハ杜若をヨメル也。サレハ、業平モ、二条后ノ御形見ノ事ヲ思出テ、杜若ヲ云也。

とあり、一方、同じく古注である『増纂伊勢物語抄冷泉家流』九は

かきつはたとは、人のかたみを云物也。されは、二条の后の御事を、御方見といはんか為に、かきつはたと云ふ也。『後撰集』に云く、うへをきし昔の宿の杜若色計こそ形見なりけれ
『日本紀』云、民部少輔光久と云人、……自是して、人の形見に杜若を読也。されは、業平も二条の后の御形見の事を思ひ出て、杜若を云也。

とあることに関係しているのではないかではないか。これは衲叟と禅竹の職能の差によるものかもしれない。禅竹は『歌舞髄脳記』に「此神楽の家風に於いては、歌道を以て道とす。歌又舞なり。此歌舞、又一心なり。形なき舞は歌、詞なき歌は舞なり」（注22）と記し、歌道と能を一体と考え、和歌を重視した能楽論を記している。この姿勢は「杜若」で在原業平を、又謡曲「定家」では藤原定家と式子内親王を描くように、歌人達をモデルにしたことからも伺い知れる。しかし、主」とするところは古註を通して形成されていた中世の業平像の劇化であった。そこには歴史が積み重ねてきた伝説、偽説、ゴシップが散りばめられ、史実や真実よりもそれらを新たな創意のための素材として扱う逞しさがみられる。しかし、『伊勢物語』古注は諸本が流布していて、利用に際して、禅竹は増纂本を典拠にした「うえをきし」を引き、衲叟は一一九番に十巻本を典拠にした「いひそめし」を引いた。原典の『後撰集』に辿れば、禅竹も誤りに気付いただろうが解説書からそのまま引用したためにこのような間違いとなったかと思われる。

一方、下句の「形見なりけれ」を「昔成けれ」にしたのは「昔」という時間的経過を際立たせ、次にくる「昔男」と響き合わせるための故意の改変とも考えられる。禅竹にとっての目標は謡による仏教的世界観の演出であり、その為の和歌利用なのである。一方、衲叟の目標は謡曲中の「誠はわれは杜若の精なり」の詞章を利用した一二〇番の自詠歌の創作にある。作歌が本旨である以上、本歌は正しくなければならなかったであろう。ただ、作者名の「義方」は「としかた」と誤っているなど、緻密な考証とはいえない。両者には典拠を正しく把握しているかではなく、自身の芸術領域を拡げるためには異説、誤りなどに拘らない姿勢がみてとれる。

四　謡曲「芭蕉」（注23）の受容

『雲玉抄』五一一番所収歌の歌は「鶏田（とりた）耕雲」（注：名前の「鶏」は異体字がはっきりしない、本稿では仮に「鶏」とする）という出自不明の歌人による引歌で、衲叟の自詠歌ではない。しかし、「謡曲と和歌」という視点において重要な問題を含有していることから本稿で注目してみた。

太田道真に知遇せし鶏田耕雲といひし人の歌に
さびしきは野寺の秋の夕間暮芭蕉にかかる雨もやぶれて（511）

『雲玉抄』五一一番は心敬が判詞を努めた歌会に、太田道灌の父・道真の歌友と思われる耕雲の歌をわざわざ掲載したものである。この意味は何だろう。左注は次のようにある。

此歌を心敬合点し、雨ややぶるるぬしのよし仰せけるとや、とてもあだし事を、上句をも歌になしてあらばや、能能詠吟し給へかし、上句は連歌なり、又雨は芭蕉にやぶれて芭蕉をやぶらかして、風わたる野寺の秋のさびしきは芭蕉にかかる雨もやぶれて、とあらまほし（後略）

耕雲の歌に心敬は合点したが、衲叟は納得していない。耕雲歌上句の「さびしきは野寺の秋の夕間暮」と下句の「芭蕉にかかる雨もやぶれて」の付け方が和歌としては面白くない、これは連歌である、と主張している。「雨は芭蕉に破れている」のかそれとも「雨が芭蕉を破っているのか」破る主体と破られる客体を問題視している。結局、和歌であるならば、「風わたる野寺の秋のさびしきは芭蕉にかかる雨もやぶれて」と詠むべきだという主張である。衲叟は「芭蕉の破れ」という構図を注視している。この現象を端的に示すのが、謡曲「芭蕉」である。

「芭蕉に落ちて松の声　あだにや風の破るらん」
「よしや思へば定めなき　世は芭蕉葉の夢の中に　牡鹿の鳴く音は聞きながら　驚きあへぬ人心」
「返す袂も　芭蕉の扇の　風茫々と　ものすごき古寺の　庭の浅茅生　女郎花刈萱　面影うつろふ露の間に　山颪松の風　吹き払ひ吹き払ひ　花も千草も　散りぢりになれば　芭蕉は破れて　残りけり。」（謡曲「芭蕉」）（注24）

謡曲では「あだには風の破るらん」とあり「風」が芭蕉葉を破っている。また、「よしや思へば定なき。世は芭蕉葉の夢の中に牡鹿の鳴く音は聞きながら驚きあへぬ人心」と芭蕉が老女に化け、僧と無常感について問答している。「世は芭蕉葉の夢の中に牡鹿の鳴く音」とあるが、『雲玉抄』二三八番歌に、

鹿の歌とて
又も世にあはぢの舟路かひぞなき夢のつげのと我はいひしか（238）

これは、つげ野のしか、淡路島にめをもちて二みちにかよひしが、ある夜、をしかの夢に、わが身に芭蕉おひて霜のおきければかれぬと見て、めしかにかたるに、さてはかへるとてみちにてかり人にあはん、とまれといひけれど、かへるに、舟人に海上にていころされぬ、その晩、めしかのよみしとなり、蕉鹿の夢といふ古事、日本にもこれなり、大唐に此古事各別なり

とある。二三八番歌の詞書は「昔、夢野（現在の神戸市兵庫区）にいたという夫婦の鹿が素材となっている。『日本書紀』「仁徳三八年秋七月」の条や『摂津風土記』逸文に見える伝説で、のち和歌などにもよく詠まれている。「芭蕉の夢」（注25）は中国戦国時代の『列子』周穆王（しゅうぼくおう）篇にある故事である。「中国の春秋時代、鄭（てい）の国の人が鹿を仕留めて芭蕉の葉を被せて隠したが、隠した場所を忘れたために、鹿を仕留めたのは夢だったかもしれないと諦めた」というもの。芭蕉に託して「夢が破れる」のがキーワードとなっている。このように、『雲玉抄』二三八番の自詠歌の本説は「破れる」を中核にして、謡曲「芭蕉」の詞章とも共有されている。『雲玉抄』は二三八番歌と五一一番歌は各々独立して配置され、無関係のようになっているが、謡曲では、「風の破れ」と「夢の破れ」を芭蕉に関連した故事として同一曲に取り込んでいる。重要なのは、芭蕉は「破れ」に直結していることである。

芭蕉という植物は中国原産のバショウ科の多年草で、バナナと同種。中国南部から渡来し、日本では平安朝から親しまれていた。夏には長く大きな葉を広げ、秋にはその葉がばっさりと落ちる。芭蕉の茎は大木のように成長するが重なり合う長い葉鞘でできた偽幹が直立す

る。これを切っても中に木質部がなく、諸法は空であるとの喩えにする、とある（注26）。芭蕉は存在において、「無常」を表わす植物だといえる。「風に当たれば破れ、雨にあたれば破れ、夢を抱けば破れる」、それが芭蕉である。俳句の十月の季語に「破芭蕉（やれば しょう）」があり高濱虚子の句に「横にやれ終には縦に破れ芭蕉」と吟じられて、現代にまで「芭蕉と破れ」は切っても切れない関係を保っている。

五一一番に戻れば、引歌にされたのは太田道真、つまり道灌の父の歌友である。道真は『雲玉抄』のこの箇所だけに、唐突に名前だけが出てくる（木戸孝範の場合は父小府のことを五〇七番に詳しく記す）。何も説明を付していないが、衲叟の引歌の背後には道灌があったのではないかと考えてみたい。

衲叟と道灌は二五〇、二五一番に

かかる身のなぐさめ草のかげとてや月の桂の世におほふらん（250）

これは、太田道灌、江島参籠の時、一座一の歌と諸人申せし、その時同題にて、衲叟

世にもれぬ月の桂の影ならで何を心のやどり木にせん（251）

とあり江の島参籠に同道した歌友同士と考えられるからである。その道灌は文明十八年（一四八六）七月二十六日、主君・扇谷上杉定正によって相模の糟谷で暗殺、横死を遂げる。その暗殺の理由を定正は『上杉定正状』に述べている。「都城百雉（とじょうひゃくち）に過ぐるは國の害なり」。つまり『春秋左氏伝・隠公元年』の故事を引用して、地方の諸侯の城があまり広大でありすぎるのは中央集権の弱化となり、国の害となる。道灌の城も堅固であり、且つ家政を独占したために家中に不満が起こった、しかも道灌は盟主である山内顕定に謀反を企てたためだ（注27）、と説明している。

この事件に遭遇して道灌の三回忌（長享二年（一四八八）七月）に、「太田二千石春苑道灌静勝公（しゅんえんどうかんせいしょう）」の詩を霊前に捧げたのが万里集九（ばんりしゅうく）という禅僧である。（注28）。

東遊、遠シト雖モ君ノ為ニ招カル
冤血（おんち）、端無クモ九霄（しょう）ニ濺（そそ）グ
枕ヲ借ルコト三年ニシテ、裁（わず）カニ夢ニ見ル
風ハ吹ケドモ、芭蕉ヲ破却セズ（「梅花無尽蔵」、原文は漢文）

この中に、「芭蕉を破却せず」と記している。万里の夢に芭蕉が現れ、芭蕉は雨風に抗しかねて破れるとされるが、道灌に擬えた芭蕉は破れていない。道灌は軍に敗れたのではなく横死であったことを言いたかったのではないか。つまり、定正は道灌が盛りの芭蕉葉のように勢力を拡大したから脅威を感じてこれを破った。一方、万里は夢に見る道灌という芭蕉葉は風に破られていない、という。道灌は生前万里の庇護者であり、道灌横死後、万里は東国を去っている。「破る、破られる」という現象軸に芭蕉という植物は位置するが、その中身は木軸をもたない「空」である。そこには禅の悟りがある。衲叟の「芭蕉の破れ」への拘りは東国を駆け巡った歌友たちの挽歌の意味が込められている。これが禅僧万里の芭蕉を道灌に投影した眼差しなのである。

五　おわりに

本稿が取り上げた三曲は金春禅竹作もしくは禅竹作と見做されるものである。そしてこの三曲に共通するキーワードの一つが「杜若」の詞章にある「草木国土　悉皆成仏」（注29）である。そこには衲叟も禅竹も目の当たりにしたであろう滅ぶものすべての成仏がある。「芭蕉」では「薬草喩品あらはれて草木国土有情非情もみなこれ諸法実相」とある。「雪鬼」では「有情非情は隔てなき　これぞまことに雪鬼の　もとよりわれは鬼にはあらず」の詞章に通底する。つまり三曲に現れた「杜若の精、芭蕉の精、雪の精」の共通項は「悉皆成仏」の象徴である。「芭蕉」に「それ非情草木と言つぱまことは無相真如の体　一塵法界の心地の上に　雨露霜雪の形を見す」として、非情の草木ではあっても、実は不変の実相を備えていて一塵の中に全宇宙が包

摂されるという真理から、本来一体の「水」が雨露霜雪の姿に変じ、草木もその時々で種々の姿を見せるという法華経の教理が説かれている。そこには「精」のそれぞれ形は異なっても元は「水」であるという深淵が主張されている。「沢辺の杜若、芭蕉の露、消える雪」という表象は生命現象の流転を暗喩するが、支えている根源は「水」である。『雲玉抄』の五八一番の巻軸歌が「むすぶ手に清きこころをあらはしてながれぞいづる山陰の水」と結ばれているのも、衲叟の軸足が「水」にあることを物語っている。

注釈

(1) 伝本は神宮文庫蔵本、京都大学附属図書館蔵本、内閣文庫蔵本、松平文庫蔵本、黒川家文庫蔵本など。神宮文庫蔵本は『新編国歌大観』に、京大本は『古典文庫』に翻刻されている。奥書に「永正十一年四月六日　作者　衲叟馴窓書之」とある。更に『八洲文藻』に「源貞範」の名がある。

(2) 明和九年（一七七二）刊。犬井貞恕（一六二〇～一七〇二）撰。「能本」「謡本」といわれたものについて「謡曲」の語を使用した最も早い使用例といわれる。

(3) 佐々木雷太「雲玉和歌抄と謡曲」『伝承文学研究』六〇号　二〇一一

(4) 佐々木雷太「雲玉和歌抄における西行歌と撰集抄」『仏教文学』三六・三七号　仏教文学会　二〇一四・九

(5) 作者不詳の複式夢幻能、金春流といわれる。旅僧が雪の河内禁野の片野で女に宿を借り雪鬼と業平の恋物語を聞く。その女こそ雪鬼で、僧の夢に現れ、回向を謝し舞を舞う。『詞花集』一五二番歌を典拠とする。三宅晶子「もみじに冷淡な世阿弥」（『中世文学の回廊』）勉誠出版二〇〇八　四九八頁「四季に分類した世阿弥関係の能」に七十曲中の「冬」は四曲とある。

(6) 『詞花集』巻第四冬一五二番『新編国歌大観　第一巻勅撰集編　第四版』角川書店　一九八七　一七七頁

(7) 『歌論集（新編日本古典文学全集八七）』小学館　二〇〇二

(8) 『伊勢物語』「八二」（新潮日本古典集成）新潮社　一九七六　九六～九七頁

(9) 『新古今集』巻第二春下一一四番　『新編国歌大観　第一巻勅撰集編　第四版』角川書店　一九八七　二一九頁

(10) 『太平記一』（新潮日本古典集成）新潮社　一九七七　六五頁

(11) 西野春雄「能面雪鬼考」『能楽研究』法政大学能楽研究所　三一号二〇〇七　十二頁に徳江元正氏の指摘によるとある。

(12) 『長禄記』（続群書類従第二十輯上　訂正三版）続群書類従完成会一九八九　二四六頁

(13) 『宗祇諸国物語』は西村市郎右衛門による江戸前期（貞享二年（一六八五）刊）の浮世草子。『近世文學資料類従仮名草子編　二八』勉誠社一九七七に所収。

(14) 今野圓輔『日本怪談集［妖怪篇］』社会思想社　一九八一の「雪女」の項目には①雪の精霊、化身として姿を現わすもの、雪後や吹雪の夜に白い女の姿をただ遠くから見かけ、自然への脅威の畏敬として雪鬼、雪神信仰が変化したもの。②吹雪で行き倒れになった者の霊魂が出て来る幽霊話。③女を風呂に入れたら泡になっていた、女を囲炉裏にあたらせたら融けたという類の話。の三系統があるとしている。

(15) 「雪鬼」（復曲本）田中充編『未刊謡曲集　続十六』古典文庫一九九五　一四〇～一五一頁。

(16) 金春禅竹作と考えられる。精・神仙物。三河国八幡に立ち寄った諸国一見の僧の前に、杜若の精が現れ、この地で折句を詠んだ業平の故事を語り、僧を庵に招く。そして、業平と高子の后の形見の冠、唐衣を着し『伊勢物語』の根本を語り舞う。『伊勢物語』「九」や『伊勢物語』古注を典拠とする。

(17) 『伊勢物語』「九」（新潮日本古典文学集成）』新潮社　一九七六　二一～二三頁

(18) 「杜若」伊藤正義校注『謡曲集上』（新潮日本古典集成）』新潮社一九八三

(19) 『後撰集』巻第四夏　一六〇番　『新編国歌大観』第一巻勅撰集編　第四版』角川書店　一九八七　一九二頁

(20) 「杜若」『謡曲拾葉抄』（国文註釈全書六）すみや書房　一九〇七三〇四頁

(21) 片桐洋一、山本登朗編『伊勢物語古注釈大成　第一巻』笠間書院二〇〇四　十五、八五頁

(22) 『世阿弥　禅竹（日本思想大系二四）』岩波書店　一七七四　三四二頁

(23) 金春禅竹作。精・神仙物。中国の楚の国瀟水に山居する僧が、毎夜、法華経を読誦していると女が現れる。僧は女を庵に招き入れ、薬草喩品を聞かせると芭蕉の精であると告げる。再びある月の夜に芭蕉の精は現れ、諸行無常を唱えつつ舞を舞う。法華経の草木成仏、維摩経の芭蕉、蕉鹿の夢等を典拠とする。

(24) 「芭蕉」伊藤正義校注『謡曲集下』（新潮日本古典集成）』新潮社二〇一五　九二、九九頁

(25) ①『日本書紀』巻第十一　仁徳天皇紀（『日本書紀二』（新編日本古典文学全集三）五二～五四頁）

卅八年春正月癸酉朔戊寅、立八田皇女爲皇后。秋七月、天皇與皇后、居高臺而避暑。時毎夜、自菟餓野、有聞鹿鳴、其聲寥亮而悲之、共起可怜之情。及月盡、以鹿鳴不聆、爰天皇語皇后曰「當是夕而鹿不鳴、其何由焉。」明日、猪名縣佐伯部、獻苞苴。天皇令膳夫以問曰「其苞苴何物也。」對言「牡鹿也。」問之「何處鹿也。」曰「菟餓野。」時天皇以爲、是苞苴者必其鳴鹿也、因語皇后曰「朕、比有懷抱、聞鹿聲而慰之。今推佐伯部獲鹿之日夜及山野、卽當鳴鹿。其人、雖不知朕之愛以適逢獮獲、猶不得已而有恨。故、佐伯部不欲近於皇居。」乃令有司、移鄉于安藝渟田、此今渟田佐伯部之祖也。俗曰「昔有一人、往菟餓、宿于野中。時二鹿臥傍、將及鶏鳴、牝鹿謂牝鹿曰『吾今夜夢之、白霜多降之覆吾身。是何祥焉。』牝鹿答曰『汝之出行、必爲人見、射而死。卽以白鹽塗其身、如霜素之應也。』時宿人、心裏異之。未及昧爽、有獵人、以射牡鹿而殺。」是以、時人諺曰「鳴牡鹿矣、隨相夢也。」

② 『摂津風土記』逸文『風土記』（新編日本古典文学全集五）四二七～四二八頁

昔者、刀我野に牡鹿ありけり。その嫡の牝鹿、この野に居りけり。その妾の牝鹿、淡路の国の野嶋に居りけり。…明旦、牡鹿その嫡に語りて云ひつ「今夜の夢に我が背に雪零りおけりと見き」といふ。また曰ひつ「すすき村生ひたりと見き。この夢は何　の祥そ」といふ。その嫡、夫のまた妾が所に向くを悪み、乃ち詐り相せて曰はく、「背の上に生ひたる草は、矢、背の上を射る祥そ。また雪の零りけるは、塩を春きて宍に塗る祥そ。汝、淡路の野嶋に渡らば、必ず船人に遇ひ、射えて海中に死らむ、謹勿また往きそ」といひけり。その牡鹿、感恋に勝へず、また野嶋に渡りけり。海中にて遇に行く船に逢ひ、終に射殺されけり」とそいふ。故、この野を名づけて夢野と曰ふ。

③ 『西行法師家集』（『新編国歌大観第三巻私家集Ⅰ』）六〇五頁「暁鹿　夜をのこすねざめに聞くぞ哀れなる夢のの鹿もかくやなくらん」

④ 『万葉集』巻一〇・二一四二番『万葉集三』（岩波文庫）一八四～一八五頁「さを鹿の妻ととのふと鳴く声の至らむ極みなびけ萩原」。鹿は一夫多妻なので、秋の発情期には一頭の雄が複数の雌を率いる現象が歌にされている。

(26) 「芭蕉」『岩波仏教辞典第二版』岩浪書店　二〇〇二　八二二頁

(27) 「上杉定正状」小澤富夫編・校訂『武家家訓・遺訓集成』ぺりかん社一九九八　一〇七頁

(28) 『春秋左氏伝一』（新釈漢文大系三〇）明治書院　一九九八　四八頁
中川徳之助『万里集九（人物叢書）吉川弘文館　一九九七　一七一頁
万里集九は『江戸名所図会』巻六に「孝範家の集、武蔵国豊嶋といふ郡に、入江かけたる所に住みはべりける。前はよし芦など茂りてと云々。又梅花無尽蔵の詩の序に、木戸罷釣翁と号し、共に武野の佳境隅田の上流に寓すといへり」とある。衲叟も『雲玉抄』の「序」に「若年の比武州江城辺に星霜をおくりし」とあるから、道灌の江戸城周辺に、衲叟、木戸孝範、万里集九らが住み着いていた可能性も考えられる。

(29) 非情の成仏をいう慣用語。『法華経』薬草喩品に、一地より、毒草も薬草も生えるが、一雨によって皆薬草となるという比喩を以て非情の草木の成仏を説く。「非情」とは感情を持たない植物、鉱物のこと。